令和5年度(2023年度) 学校評価総括表　　【伊丹市立鴻池小学校】

教育目標	ひとみ輝き　笑顔あふれる　鴻池小学校
重点目標	○確かな学力の育成　　○豊かな人間性・社会性の育成　　○たくましい心身の育成

主要施策	施策目標 基本施策		重点項目	具体的施策	達成目標	自己評価	成果と課題	改善策	学校関係者の評価
学校教育	知・徳・体の調和のとれた児童・生徒の育成	「確かな学力」の育成 ①授業改善 ②誰一人取り残さない取組 ③学校・家庭・地域の連携	○「主体的・対話的で深い学び」の視点での授業改善	・児童の実態に応じた授業づくりの実施	・教員アンケートから「授業改善に努めている」について90%以上を占める。	B	・教員アンケートの結果（100%）に示されるように、児童の実態に即した授業改善を行うことができた。	・引き続き児童の実態を把握し、それに応じた授業づくりを行っていく。	・今後も子どもたちの実態を丁寧に把握し、様々な形の授業を実践していくことを期待する。
			○基礎的、基本的な知識・技能の定着	・国語・算数の基礎的、基本的な知識・技能の定着に向けた朝学習の質の向上	・児童および保護者アンケートから朝学習や宿題等に関する達成度について90%以上を占める。		・基礎的、基本的な知識・技能の定着に向けた朝学習及び宿題等を行うことができた。（児童及び保護者共に目標値を上回っている。）	・保護者アンケートで自主学習の項目においての達成度が約6割と低いことから、家庭学習の取り組みを各クラスで見える化する等の工夫を行っていく。	・自主学習の必要性について、具体的な取組も踏まえて保護者へ積極的に発信していく必要がある。
				・計算力の定着を図るため、各学年ごとで定期的に計算確認テスト、4年～6年は標準学力検査CRTの実施。	・計算確認テストや単元テスト等の結果を通して、児童一人一人への個別指導や学年指導等に生かす。		・各学年で計算確認テストを実施し、その結果から児童の実態を把握することができた。また4年～6年CRTテストの結果を一人一人の課題解決に生かすことができた。	・引き続き計算力の向上を図るために計算確認テストを継続し児童の実態把握を行っていく必要がある. また、CRTテストを生かした個別指導の取り組みの改善も行っていく。	・計算確認テストやCRTなど、客観的なデータで経年比較をしていくのは非常に効果的である。来年度も継続してほしい。
			○学級を基盤とした児童理解と学級活動の充実	・学級力アンケートの全学級実施とその活用の工夫	・各学級で年間6回の学級力アンケートを実施し、それを生かした学級経営を行う。		・2～6年生の各学級において年間5回の学級力アンケートを実施し、それを生かした学級経営を各担任が意識して行うことができた。また、児童アンケートからも本実践がよりよい学級づくりに生かすことができると約9割の回答が得られた。	・引き続き学級力アンケートを生かした児童の主体性を育む学級づくりを意識させていく。	・学級力アンケートは、子どもたちが「自分たちが学級を作っていく」という意識を高めるために良い活動である。来年度も継続を期待する。
			○読書活動の充実	・図書館を開放し、いつでも本を手にすることができる環境を整える。 ・児童のニーズにあった書籍購入を行い、図書館の充実を図ると共に書籍紹介や新刊掲示の工夫等、読書意欲を高める取組を行う。 ・児童が主体となる委員会活動を通して、読書活動の充実を図る。 ・家庭との連携を図り、週末に読書をすることの徹底を図る。	・週1回の朝読書の徹底を図る。 ・司書教諭や委員会活動、PTA等との連携を図り、より充実した読書環境の整備にあたる。		・週1回の朝読書を意識して行うことができた。 ・児童が主体となってイベントの企画・運営を行った委員会活動やPTAの取組（読書ボランティアの読み聞かせ活動）の実施により児童の読書に対する意識が向上した。（図書の貸出冊数及び読書冊数が昨年度に比べ増加） ・児童アンケートでは自ら読書に親しもうとしている児童が80%以上を占めているが、保護者アンケートでは家庭での読書活動については40%に届いていない。	・担任や図書館司書との連携をを通して児童の読書に対する意識を高めていく。 ・引き続き委員会活動の充実やPTAとの連携を深めることを通して、児童が読書に対して興味を持つ機会をつくっていく。 ・週末や長期休暇等の宿題として週末読書の徹底を行い、家庭における読書の定着を図っていく。	・学校での読書活動が大変活発に行われているのはとても良いことである。委員会の子どもたちの豊富なアイデアも活かされ、ボランティアの協力も良い効果を生み出している。家庭での読書は、保護者も含めて啓発していく必要がある。 ・家庭における読書については、明確な記録をするなど工夫を行い、読書量の見える化や意識付けを実践していく必要がある。
		新しい時代に対応した教育の推進 ①情報活用能力の育成 ②英語教育の充実 ③デジタル化の促進	○全ての児童の可能性を引き出す、個別最適な学びと協働的な学びの実現	・学ぶ意欲を持たせるために課題設定を工夫 ・タブレット等ICT機器の積極的な活用の促進	・児童アンケートから、「教師の授業の工夫」や「児童自ら学ぼうとする意欲」について90%以上を占める。 ・教員アンケートから、「普段の授業や教育活動、またオンライン授業等で一人一台タブレット端末を活用したか」について90%以上を占める。	A	・児童アンケートでは約97%が「先生が教え方を工夫していた」と回答していた。また、「分かりやすくて楽しいか」との問いでも90%と概ね達成することができた。 ・授業や教育活動においてタブレット等ICT機器を日常的に活用しており、またそれを効果的に使っていると答えた教員が約95%いることが明らかとなった。また、OJTを生かしたICT機器活用研修を行うことができた。	・学習に課題のある児童に対して今後も個別に対応していく。 ・タブレット端末が日常的に活用されていくことで児童のスキルも向上している。今後は児童の実態に応じた効果的な活用方法についてより具体的な研修等を行っていく。	・ICTの活用が、学習に課題のある子どもたちにとって有効な手段となるよう、今後も工夫を重ねてほしい。 ・タブレット端末の使用について、日々スキルが向上している。一方で、情報モラルなど正しい使い方についても指導をしていく必要がある。
		「豊かな心」の育成 ①道徳教育の推進 ②いじめ等の未然防止、早期発見、早期対応に向けての組織的な取組の推進 ③不登校の児童生徒やその保護者への支援体制の充実 ④体験活動等の実施	○豊かな心を育てる道徳教育の推進	・全教育活動を通して、児童の自己有用感を高める取組について指導及び支援を行う ・考え、議論する道徳科に向けた授業改善の実施	・児童アンケートから、「自己有用感が得られた」ことについて80%以上を占める。 ・児童アンケートから「道徳科の授業で、自分自身を見つめ、よりよく生きるための心について考えようとした」について80%以上を占める。	A	・児童の自己有用感を高める取組を教員が意識し、その指導及び支援を心掛けたことで、関連児童アンケートの結果が目標値を上回る（約90%以上）ことができた。 ・考え、議論する道徳に向けた授業改善を教員が意識して行うことができており、関連児童アンケートでは目標値を上回る約90%以上の児童がよりよく生きるための心について考えようとしていることが明らかとなった。	・引き続き自己有用感を高められる取組を職員で情報共有したり、学習活動の見直しや改善を図っていく。 ・考え、議論する道徳科に向けた授業改善に向けて教材研究や内容項目等について意識し、深い学びのある授業の実現を目指していく。	・自分が活躍できる機会が多く設けられたことが、自己有用感の向上に大きく影響している。今後もその機会を、子どもたちのアイデアも活かしながら実践していってほしい。 ・道徳の授業について、互いの授業を見合ったり、先進的な研究をしている教員から学んだりすることで、より深い学びが子どもたちが得られるようにしてほしい。
			○いじめや問題行動の未然防止と、早期発見、早期対応の徹底	・いじめアンケートや児童アンケート等の実施及び実態把握 ・児童の実態把握及び職員間での情報共有と組織的対応の実施	・いじめアンケートや児童アンケート等の結果を基に、教員全体で実態把握及び情報共有を図り、適切な対応を組織的に行う。		・いじめアンケートや児童アンケートを基に実態把握及び教職員で情報共有を図り、迅速かつ組織的に対応を行った。	・引き続き、各種アンケート等を活用して児童の実態を把握し、教員間で情報共有を図りながらさまざまな問題の未然防止や早期対応に努めていく。	・各種アンケートを活用した早期対応や、いじめを許さない学校づくりなどの未然防止に努めるなど、子どもたちが互いを理解しながら安心して過ごせる環境づくりに、今後も力を尽くして欲しいと願っている。
			○よりよい学校生活にむけた児童による学校づくりへの参画に対する意識の向上	・児童が主体となる委員会活動を通した、よりよい学校づくりに向けた取組の企画、運営等の実施。	・各委員会活動で実施している取組の成果や課題、及び改善等についての児童を中心とした話し合いを行い、より一層の活動の充実を図る。		・よりよい学校づくりに向けて委員会活動の充実を図り、その活動を通して全校児童の意識を高めることができた。	・よりよい学校づくりに向けて、児童自身が考えて取り組んでいく委員会活動を今後も支え推進していく。	・児童が主体となる委員会活動により、「学校は自分たちが運営していく」という責任感や達成感も生まれる。様々なアイデアが実践できるような機会をたくさん設けていってほしい。
		「健やかな体」の育成 ①児童生徒の体力向上の促進 ②魅力ある部活動の推進 ③発達段階に応じた健全な食育の推進	○たくましい心身の育成	・運動する楽しさや喜びを体感できる体育科授業の実施 ・早寝・早起き・朝ごはんの確立	・児童アンケートから「体育科の授業で運動する楽しさや喜びを感じている」について80%以上を占める。 ・「朝食を食べている」について、子ども及び保護者アンケート共に、90%以上を目標とする。	A	・児童にとって運動する楽しさや喜びを体感できる体育科授業を行うことが関連アンケートから明らかとなった。（児童、教員ともに約97%の好意的回答）また、授業以外にも休み時間に「業間縄跳び」や委員会活動イベントを実施し、運動する楽しさや喜びを体感できる機会を設けることができた。 ・朝食を食べることに対する意識が子ども、保護者ともに昨年度に引き続き90%以上を超えることができた。	・体育科での取り組みを教員間で共有を図り、授業内外問わず体を動かすことの楽しさや喜びを児童が体感できるように授業の充実を目指す。 ・引き続きPTAとの連携を図りながら規則正しい生活を心がけ健康な心と体を作っていくことついて引き続き啓発に努めていく。	・楽しく運動できる機会を、委員会の子どもたちなどからもどんどん発信してくれれば良いと感じている。 ・早寝早起き朝ご飯には、家庭の協力が必要不可欠である。PTAとも連携しながら、今後も啓発を積極的に行ってほしい。
	教育相談・支援体制の充実 ①キャリア教育の推進 ②スクールカウンセラー・スクールソーシャルワーカーの活用 ③教育相談の充実		○教職員全体で行う児童理解の実施 ○状況に応じた関連機関との連携	・定期的に学年や学校全体での研修会や情報交換等の実施。 ・スクールカウンセラーやソーシャルワーカーとの共通理解及び連携。	・教員アンケートから、「本校では児童一人一人への理解を学校全体で共通理解し、その支援に努めることができていますか。」について90%以上を占める。 ・支援が必要な児童に対して、スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカー等と情報を共有し、よりよい支援体制を構築する。	A	・児童理解のための研修や月1回の児童の様子についての教員間で情報交共有を図ることで、学校全体で支援を要する児童についての理解に努めることができた。 ・スクールカウンセラーやソーシャルワーカーとの連携を行い、教員との情報共有や児童及び保護者に対する支援を行うことができた。	・引き続き、支援を要する児童に関することについて研修等を通して情報共有を図り、児童の適切な支援に繋げていく。 ・引き続き、スクールカウンセラーやソーシャルワーカーと連携を行いながら、情報交流を図り、それをよりよい支援に活かしていく。	・新たな困り感を持っている子どもについての気づきを活かし、支援を受けながらいきいきと学べる学校づくりに今後も努めてほしい。 ・教師だけでなく、専門的な知識を持った関係機関との連携を今後も密にしながら、より良い支援の検討につなげていくことを期待する。
	特別支援教育の推進 ①伊丹特別支援学校の活性化 ②特別支援教育の充実		○個に応じた支援計画とその実施	・支援が必要な児童の教員間の共通理解の徹底と適切な支援の実施	・児童のニーズに応じた組織的な支援体制の構築を図る。 ・教員間の共通理解を目的とした研修会を年2回以上実施する。	A	・学習支援員と連携をとりながら支援を要する児童について情報を共有し、児童のニーズに合った支援を行うことができた。また、必要に応じてケース会議を行い、児童の実態把握や情報共有を職員間で行うことができた。 ・研修会を年間2回実施し、配慮が必要な児童や、その支援方法等について職員全体で共有することができた。	・今後も学習支援員と支援体制について連携を図りながら児童のニーズに応じた支援を行っていく。 ・引き続き配慮が必要な児童について全教員で情報共有を行いながら組織的な対応に努めていく。	・支援を要する子どもについては、悩みを抱える保護者とも丁寧に連携を図っていく必要がある。関係機関とも情報共有を行いながら支援を進めていってほしい。 ・教師のニーズに合った研修の機会を設け、支援につなげられるような学びを深めてほしい。
	教職員の資質向上 ①研修等の充実		○校内における授業研究の充実	・言語活動や交流・体験活動を通した表現力の育成 ・他者との協同により考えを広げ深める学習の充実 ・身につけた力を自覚できる振り返りの時間の確保 ・教員が普段の授業を参観し合える環境づくりの促進	・教員アンケートから「子ども同士が対話をする活動を意識した授業ができましたか？」について90%以上を占める。 ・教員アンケートから「授業で学んだことを日常生活や他教科で生かそうとする子どもを意識した授業ができましたか？」について90%以上を占める。 ・教員アンケートから「授業のめあてに対して振り返りをさせることができましたか。」について90%以上を占める。 ・教員アンケートから「教員に開かれた教室になっている」について90%以上を占める。	A	・全教員が言語活動を意識した授業づくりを行うことができた。（関連教員アンケート結果は約97%） ・学んだことを他教科や日常生活に活かすことのできるように意識して授業づくりをすることができた。（関連教員アンケート結果は約93%） ・授業のめあてと振り返りを意識した授業づくりをすることが概ねできている。（関連教員アンケート結果は約90%） ・教員間で参観し合える開かれた教室を意識することができた。（関連教員アンケート結果は約91%）また、OJLを活かした自主研修（授業づくりやICT活用等）も定期的に行うことができた。	・言語活動や交流・体験活動を今後も意識していくとともに、活動あって学び無しとならなぬよう、質の向上にも努めていく。 ・今後も教員がカリキュラム・マネジメントを意識した授業づくりを行い、一つの学びが他教科や日常生活でも活かすことができるような学習の充実を図っていく。 ・今後もめあてと振り返りを意識した授業づくりを心がけ、児童の意欲や興味関心につなげていけるようにしていく。 ・今後もOJLを活かし、教員の学びが得られる環境や研修等の充実を図っていく。	・子どもたちの言語活動にあたって、その活動によってどのような効果を生み出したいかを明確にしていく事が必要である。 ・「この学びは、他のところで学んだことが活かせる」ということを子どもたちが意識することで、学びのさらなる深まりが期待できる。 ・授業のゴールを示しためあてと、そのめあてに沿っての自分の学びのふり返りのつながりを意識した授業づくりについて、今後も研鑽を重ねてほしい。 ・教員の中にある課題や、学びのニーズに即した研修の企画を行いながら、教師力の向上に努めてほしい。

教育環境の整備・充実	学校を支える組織体制の整備 ①コミュニティ・スクールの充実 ②地域と学校の連携・協働体制の構築	○積極的な情報収集と適切な情報発信の実施	・学校通信やホームページ等を活用した学校教育活動の積極的な情報発信	・保護者アンケートから学校情報の発信における満足度について90%以上を占める。 ・状況に応じて、休校や学級閉鎖等の学校情報を積極的に発信する。	A	・日々の学校の様子や学校関連情報等をホームページでの発信や手紙の配付、メール等の活用を通して積極的に発信を行った。学校情報の発信についての保護者アンケートでは目標満足度の結果を上回ることができた。（約98%の好意的な回答）	・地域に開かれた学校として引き続き学校通信やホームページ等を活用した学校教育活動の積極的な情報発信を継続していく。	・ホームページやGoogleクラスルームの配信については、非常に充実しており学校の情報を得られやすい。今後も子どもたちのリアルな姿や学びの様子を積極的に配信してほしい。 ・「地域と学校の協働体制」をさらに強めていきたいと考えている。
	安全・安心な教育環境の充実 ①学校園防犯訓練・防災教育の充実 ②子どもの安全対策の推進 ③交通安全対策の推進 ④学校園施設の整備・維持保全 ⑤学校における働き方改革の推進	○学校教育目標達成に向けた教職員の意識の徹底	・校務分掌における活動内容が学校教育目標達成を目指しているかの見直しを図る。	・教員アンケートから、「自身の校務分掌の活動内容は学校教育目標の具現化を図ることができたか」について90%以上を占める。	A	・教員が学校教育目標を意識し、それを達成するべく各担当で創意工夫を行っている。教員アンケートでは約97%の教員が具現化を図ることができたと回答している。	・今後も学校教育目標の達成に向けて教員一人一人が意識し、児童の実態に応じた取り組みを意識して行っていく。	・学校教育目標を実現するという共通した意識を持ちつつ、教職員が一人ひとりの役割を担っていくことが必要である。
		○非常時における学校の危機的管理体制の充実	・避難訓練の工夫・改善	・状況に応じて、適切に対応できるよう、避難訓練を計画的に実施する。		・火災や地震、また授業中や休み時間等の状況に応じた避難訓練を行い、児童に安全を意識して取り組ませることができた。（関連児童アンケート結果は約92%） ・こうのいけ幼稚園と連携した引き渡し訓練を行うことができた。	・各回の避難訓練における成果と課題を全教員で情報共有し、どのような非常時においても落ち着いて避難ができるように児童に対して指導を行う。また、よりよい訓練方法の検証や家庭及び幼稚園と連携した避難訓練を行っていく。	・火災や地震など、いつ起こるかわからない災害の時には、自ら命を守るための行動を取れることが大切である。今後も訓練や研修を定期的に行うことを続けていくことが必要である。
			・自然災害や緊急時等による休校等における情報の発信	・状況に応じて、休校や学級閉鎖等の学校情報を発信する。		・「安全だより」を発行して家庭に防災に関する啓発を行うことができた。	・引き続き、GoogleClassroomや手紙等を用いて適宜情報発信を行っていく。	・学校からの緊急の連絡について、保護者がいつでも受信できるよう準備を常に呼びかけていってほしい。
			・安心、安全に過ごせる環境づくりの促進	・児童にとって安全・安心な場所であるようによりよい環境整備に努める。		・学校の状況（学級閉鎖やその他連絡事項）に応じて、GoogleClassroomや手紙等を効果的に活用することができた。 ・安心・安全に過ごせる環境づくりを心がけることができた。（関連教員及び保護者アンケート共にほぼ全員が好意的な回答）	・月１回の安全点検を引き続き実施し、迅速に危険箇所の把握と修繕を行う。	・子どもたちが安心、安全に過ごせる環境づくりの一環として、今後も迅速丁寧に修繕等の対応をしていただきたい。
		○教職員の適切な働き方の推進	・PDCAサイクルによる業務改善の実施 ・週1回の定時退勤日の設定	・教員アンケートから、「ワークライフバランスの意識の定着」について90%以上を占める。		・教員の業務改善に向けた意識を高めることができた。（関連教員アンケート結果は全員が意識が高まっていると回答）	・ワークライフバランスの意識を高めることが児童のよりよい学びを保障し安全を守る教育につながることを意識した上で、引き続き行事や会議等の精選、校務分掌の仕事内容の見直し等を図っていく。	・業務改善で得られた時間を子どもたちのために有効に使えるよう、今後も業務の見直しや改善を続けていってほしい。

学校関係者評価総括
・学力調査の結果や学校評価に関するアンケートを丁寧に分析し、経年比較も行いながら課題分析や解決につなげていこうとしていることは、保護者にとってとてもありがたく感じた。
・全体的に高い数値で結果が出ているのは日頃の取組の成果である。異学年交流や出前授業など色々な取組が盛んに行われ、子どもたちが活発に活動している様子が日頃から伝わってくる。
・子ども達に問い、考えさせる教育姿勢は、中学以降、社会に出ても求められる力を養う基礎となる。今後も様々な取組を継続していってほしい。

次年度に向けた重点的な改善点
・読書については、保護者の読書に対する意識の低さも影響していることから、まだまだ改善できる部分が見受けられる。PTAと連携を図りながら、家庭への働きかけを検討していくなど、良策を考えていく必要がある。
・学力の定着については、各学年でそれぞれ課題がある。継続的な演習や自主学習の充実とあわせて、学校から家庭へ向け現況を積極的に配信していくなど、保護者の意識向上につなげる取組を行っていきたい。
・不登校については、低学年のうちからSC等とも連携し、未然防止も含めた取組の強化をすすめていく。

自己評価の基準　**A**：目標を上回った　**B**：目標どおりに達成できた　**C**：目標をやや下回った　**D**：目標を大きく下回った